

七搦 かおり、糸乗 貞喜

(よかネットNO.33 1998.5)

有田町観光基本構想の策定のお手伝いをさせていただいた関係で、長野県の小布施町を見学に行った。

小布施町に関しては、「北斎館ができてから観光客が100万人に増えている」とか「町全体が博物館になっている」などの評判を耳にし、前から現地に行って、地元の人から話を聞きたいと思っていた。今回、小布施町から第三セクターの㈱ア・ラ・小布施を紹介していただき、取締役事業部長の木下さんからお話を伺うことができた。

小布施町は長野市から長野電鉄で35分(約10km)の人口約12,000人の農業の町である。特に栗菓子の産地として有名で、福岡のデパートにも小布施の栗菓子が置いてある。木下さんの話によると、小布施町での栗菓子の生産額は90億円程度で、これは小布施町の全産業の総生産額300億円、うち農業(農産加工品を含む)が180億円で、その半分を占めているとこのことだった。また、栗菓子は地元で売られているのが約5%で、その他は東京や大阪などの大消費地のデパートに出ているということであった。

木下さんからは、小布施町が観光の町として全国に知れ渡るきっかけになった北斎館の建設とその周辺の景観修繕事業について、また小布施の町づくりを行っている、㈱ア・ラ・小布施についての概要を話していただいた。以下にその概要をあげる。

### 過疎の町脱出から北斎館建設まで

昭和40年代、小布施町は人口が9,000人ぐらいに落ち込んだ時期があった。その際、過疎対策として土地供給会社をつくり、200軒の住宅団地を供給した。長野市から35分という地の利のよさで、宅地は完売し、収益もあった。そこで、昭和51年に5億円の剰余金をもとに、北斎館が開設された。その後北斎館を訪れる人がだんだんと増えるようになった。

### 住民による景観修繕事業

北斎館に観光客が増えるに従って、周辺の整備も進んだ。

北斎館に隣接している北西約1.6ha内に、栗菓子店、銀行、町の高井鴻山の屋敷、2件の民家があった。昭和57年に、その地区で景観修繕事業の計画の話し合いが始まり、それから2年間の話し合いのもとに計画がつくられ、その後3年間で工事が行われた。総事業費8億円で一切補助金はない。行政は、一地主者として、費用を案分負担しただけである。そのため、事業化するにあたって、よけいな制約がなく、そこに住む人、働く人を主役にした町並み修景が可能になった。

また、この事業でおもしろいところは、土地の売買がなく、すべては土地の交換または賃貸で行われた点である。そうしたことによって、2人の民家の地権者は先祖代々の土地を売らなくてすんだという安心感が得られ、法人が民家の地権者に対し、少し高めの地代を払うことで、個人がこの事業に参加しやすくなった。

今では、この北斎館周辺には、みやげ店、栗菓子店が経営している飲食店、民間の美術館などが建ち並び、小布施町全体が博物館といった雰囲気になりかけている。

### 民の工夫のもとに運営されている第3セクター㈱ア・ラ・小布施

私たちが宿泊したのは偶然(とはいっても小布施には2件しか宿泊施設がない)㈱ア・ラ・小布施が経営するプチホテルであった。このホテルはB&B(朝食と宿泊のみ)方式の蔵を改造したもので、客室が4室の小規模なものであった。

この宿泊施設の特徴は、夜に従業員がいなくても管理できるような体制にしたり、朝食は隣接するガイドセンター併設の喫茶店でとれるようにしたりと、経費をおさえる工夫をしている点である。また、ホテルの建設費を確保する時点でも工夫が

されている。宿泊券をクーポン券として発行し、地元企業十数社に300百万円で買い取ってもらっている。それによってホテル建設による赤字が最小限に抑えられた。行政中心の第3セクターには、採算性を無視し、赤字経営のところが多いと聞く。しかし、(株)ア・ラ・小布施は、54名の住民(2,500万円)と町(100万円)の共同出資(行政の出資率はわずか4%)、従業員はすべて民間人(4人うち専任が1人)というように、行政は一出資者に過ぎず、採算性を意識した経営を行っている。

(株)ア・ラ・小布施は、他に 農産加工品(プリンター、りんごジュース等)の販売、 来訪者との交流(ガイドセンターの運営等)、 まちづくり情報の発信(視察研修の実施、情報誌の発行等)を行っており、私たちが木下さんから話をうかがったのも、(株)ア・ラ・小布施が実施している、一人800円(コーヒー付)の研修会であった。

#### 住民の手によるまちづくり

小布施町を歩いた際に、民間で経営している美術館があちこちにあったり、通り沿いの新聞屋さんが景観を配慮した建物になっていたり、それぞれの店の看板が景観にあうようなデザインになっていたり、住民一人ひとりがまちづくりに参加しているといった印象を受けた。また木下さんのお話によると、道路整備など公共的なことに関しては行政が行っているが、その他のまちづくりに関しては行政も一住民として参加するといった態度をとっているとのことだった。

小布施町全体が、歩いて楽しめる町に変わったのは、こういった住民の手によるまちづくりによるところが大きいのだろうとつくづく感心させられた。(七搦 かおり)

小布施には、1986年の夏に一度行っている。その時は、長野県内のスポーツ合宿型観光の様子を見に行っただけだが、レンタカーで長野へ帰る途中



おぶせマップ: 図中の が公・民の博物館



入館者数、年40万人と言われている北斎館

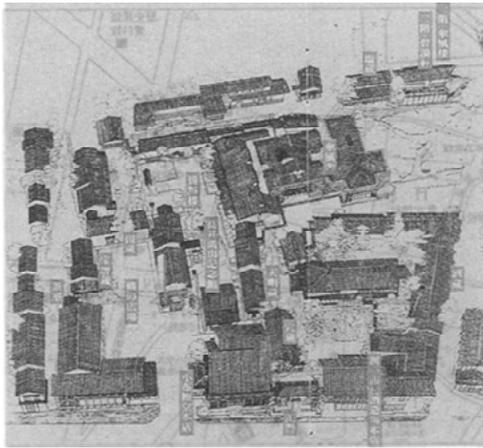


蔵を改装したプチホテル

で、電柱だけに掛かっていた「北斎館」という小さな看板を見て立ち寄ったのである。

その時に感じたことを、「地場産業としての観光」という文章の中に書いている。その時は、何の説明も聞いたわけではなく、長野から乗って大阪へ帰る列車の時間のことを気にしながら、ちょっと立ち寄っただけだが、その時の文章を引用してみる。

「長野県の小布施町では、北斎館をつくったこ



小布施堂界限図



案内表示がきわめてよく整備されていた

とによって、その一带に地元の有力者による博物館ができはじめ、一種の小さな博物館スクエアのような状況を呈している。それによって来場者も増え、アイデンティティ観光から小さいながら産業観光の方向へ歩みはじめている。」

観光は選挙に似ている

観光というものは選挙に似ている。大変な美人で人柄も抜群で人気があれば、最初から全国区に立候補し、当選できる。これが風景とか温泉とか、土地柄や人情に当たる。

その他にも金を大量に使えば代議士になれると言われている。この例は東京ディズニーランド（千葉県にあって、今まではおよそ風景を売るイメージのなかった土地）や宝塚（歌劇も含めて考える）などであろう。

一方、全国区に当選するのにもうひとつの方法がある。はじめに市町村会議員になり、市町村長になり、県会議員になり、その上で代議士に立候補し当選する。このような国会議員もたくさんおられるだろう。

観光地にもこのパターンはある。観光としては、当初「立地条件依存型」（地域の条件を活かして、「デモシカ先生」などでいうところの、デモ観光）でスタートしながら、次第に「立地条件活用施設型」へ転換し、顧客圏を拡げ全国区クラスに成長していったところである。

しかしこれらの「のし上がり型観光地」の特色は、大規模一気投資型とちがって、地域経済との結びつきが強く、単純な専門でなく兼業を含むフレキシビリティをもっていることである。それは単に観光サービス産業のみではなく、他の産業（例えば農業、土産品加工業、飲食店など）と密接な依存関係をもっている。当然のことながら、地域内の関係が広く複雑であればあるほど、同量の消費がもたらす地域内波及効果は大きいことになる。

今回行ってみると、小布施町の観光は全国区になっていた。また、当時の私の予想が当たって、「小布施」というブランドも全国区になっていた。そのブランドを原動力として、小布施栗関連の菓子はもとより、リンゴジュースなども含めた、農業関連商品の全国展開が行われていた。

当時の私のレポートには、「北斎館を中心に、観光地としての界隈が形成されてきています」とか、「北斎館に隣接する菓子工場も化粧直しをはじめています」といった説明付きの写真がそえられている。

都市再開発法によらない、素人っぽい、すばらしいまちづくり(再開発)ができていた

今回行ってみて、「形成されてきています」とか「化粧直し」と言っていたことの意味がわかった。

私が以前に行ったときは、進捗中だったのだが、その一角の再開発が、その後の町並み修景事業のモデルになっていた。

小布施堂界限図（小布施堂のパンフレットから

引用させていただいた)をもとに、説明を加えることとする。

この再開発は1.6haで、民間4者(民家2戸、信用金庫、小布施堂)と町役場の間で、任意の話し合いによって行われた。

表通りにあった民家が東の方へ移動し、信用金庫は表通りに出て、小布施堂は表から東の端の北斎館の所まで使用することになっている。

再開発法を使っていないので、「権利変換」などということはしていない。表通りの民家の人は、その土地を信用金庫や小布施堂に貸し、地代を受け取っている。この2戸は、この再開発による受益はないので、時価より「幾分高いが」というぐらいの地代設定をし、それで移築などのローンを払うようになっている。

この「話し合い型任意再開発」は、昭和57年から話し合いを始めて、工事全部が終わったのが62年頃(私の行った次の年)である。話し合いが2年、工事が3年かかっているが、それは十分納得を得るためと、仮設住宅などつくらずに、順繰りに工事をしていったからである。

この事業費は8億円、うち2.5億円は「栗の小径」という散策道を町役場が事業化した。役場からの助成金などはなく、全部自己資金(借入れも含めて)で自主的なものであったので、その後のまちづくりで、町役場に頼らない気風の見本となったということである。(糸乗 貞喜)